僕の"世界"

隠れsugar

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕の”世界”

【Ｎコード】
Ｎ７６８０Ｑ

【作者名】
隠れｓｕｇａｒ

【あらすじ】
もうすぐ世界滅亡だけど、終末ものではなく
超能力者が出てくるけど、だからどうということはなく
何が言いたいのかというと
特別だと思った平凡な日が
普通だと思っていた非凡な日常を侵食する時
”世界”の齟齬に気づいた主人公が
自己を防衛するためにどうするか
ということ

もうすぐ世界滅亡だけど、終末ものではなく
超能力者が出てくるけど、だからどうということはなく
何が言いたいのかというと
特別だと思った平凡な日が
普通だと思っていた非凡な日常を侵食する時
”世界”の齟齬に気づいた主人公が
自己を防衛するためにどうするか
ということ

「あなた、今何考えてるの？」
彼女の第一声は、意図の読めない質問だった。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

高校をさぼって平日昼間の商店街をうろつく。
駅前に大きなデパートができたせいで、この辺りも最近は目に見えて人が減った。
制服姿で歩いている僕が目立つくらいには。
どこへ行くともなしに歩いていると、後ろから肩を叩かれた。
振り向くと、中学生であろう制服を着た女の子。

「あなた、今何考えてるの？」
彼女の第一声は、意図の読めない質問だった。
「それはどういう意味？」
一体彼女は何者なのか、とか他に聞くことはいくらでもあるはずなのに、僕が返した質問は違った。
「そのままの意味。あなた、今何考えてるの？」
彼女の眼は真剣そのものだった。
「何も考えてないよ。何も」
はぐらかした訳ではない。僕は、真剣な質問に対しては少なくとも礼儀をもって真剣に答えるべきだと思っているし、実際にそうしている。
「……」
彼女はしばらく僕の眼をにらんだ後
「ちょっと話があるんだけど」
と言って、都合良く正面にあったファーストフード店に目を送る。
まあ、立ち話はあれだなと思わないでもないが、状況が理解できない。
しばし逡巡していると、彼女は僕の手を強引に引っ張って、店内へ入って行った。

僕も彼女も制服を着ているので、店員には学校をさぼってデートでもしているのかと思われたかもしれないが、その時は混乱が激しかったので、そういうことに気が回ったのは後の事だ。
「今から私の言うことは、信じられないかもしれなくても真実だから」
彼女がそう前置きして話を始めようとするのを遮って、僕は聞いた。
「君の名前は？なんて呼べばいいか困るから。僕は……藤原和文（かずふみ）。呼び方はお好きなように」
一瞬躊躇したが、僕は弟の名前を借りることにした。

彼女はまたしばらく僕の顔をにらんだ後
「私は佐藤あみ。もちろん偽名だけど、お互い様だからいいでしょ」
と言った。

「偽名？何のことだい？」
一応とぼけてみる。
「私、テレパスだから。他人の考えてることが全部分かるの」
「は？」
彼女の発言は言葉としては認識できるものだったが、理解ができず、呆けた返事をしてしまう。
「だから、さっきあなたが名前を言うのを躊躇ったときに、あなたが自分の名前を脳内で思考しているのが読めたの」
「……」
要するに彼女は超能力者ということか。
「そういうこと」
「……」
プライバシーなんてあったもんじゃない。まあ、僕には守られなければならないプライバシーなんてほとんどないけど。
「だいたい半径十数メートル以内の人間の思考は全部分かるわ。聞きたくなくても聞こえるしね」
「で、君が僕に話したいのはそれだけ？」
「まさか。…あなた、何者？」
「何者も何も、普通の人間。君と違って超能力を持ってる訳でもない。だいたい平凡に毎日を過ごしている高校生」
「じゃあなんで、商店街を歩いていた時、あなたの思考は何も読めなかったの？」
「そりゃあ、その時僕が何も考えていなかったからだろう？」
僕がそう言うと彼女は「これだから素人は」といった類の顔をした。
「あのね、人間だれしも『何も考えていない』なんてことは不可能

なの。何も考えてないと思っても、『今日の晩御飯何かな』とか『昨日のテレビ番組面白かったな』とか考えてるわけ」
その後も延々と説明を続け、最後に彼女は問うた。
「だからこそ、『何も考えていない』あなたは何なの？」

ファーストフード店を飛び出して（逃げだして？）向かった先は、自宅近所の公園。
そこそこ広くて人はいない。最高の暇つぶし場だ。
公園に着くまで先ほどの出来事について考える。
彼女の言っていることは確かに理路整然としている。
けれど、他人から面と向かって「あなたは何も考えていない」と言われると、さすがの僕でも傷つく。多分。
勝手に飛び出したのは悪かったと思わないでもないが、店でもまだ何も注文していなかったし、問題はないだろう。
さて嫌なことは忘れて、指定席となっているベンチで今日も一日過ごしますか。

そのベンチからの眺めが気に入ったので、僕がこの公園に来る時はたいていここにいる。
正面に湖（人工）、隣には桜の木（まだつぼみ）。
日当たりも良くて、うとうとするのにもちょうどいい。
そんな場所、僕の指定席に、今日は先客がいた。

「で、なんで君がここにいるんだ？」
先ほどおいてけぼりにした相手が目の前にいれば誰だって驚くだろう。
「あなたが店から飛び出す直前、思考を読んだら、この景色が見え

たの。湖なんてこの辺じゃここしかないからね」
どうやら逃げることはできないようだ。
「僕にまだ何か用があるのかい？」
「ん？別に。あなたが何も答えない以上意味ないもの」
「じゃあなんで」
「監視に来たの」
「……」
「それと、せっかくだから、あなたにも私に質問する権利をあげようかと思って」
彼女の行動原理がいまいちわからない。
が、せっかく質問する権利を得たならそれを行使しない訳にはいかない。
何せ、状況が不明すぎる。
「一つ目、学校は？」
「じゃあ、あなたは？」
やっぱりそう返されるよな…。
「二つ目、なぜ、僕にかかわろうと思った？」
「私は超能力者だけど、だからといって一介の女子中学生という身分はどうしようもない。平凡な日常から抜け出したくてイレギュラーな事件に触れてみたのよ」

彼女の発言は、僕を怒らせるには十分なもののようだった。

気がつくと僕は彼女に反論をしていた。
「平凡であることの何が悪い。全ての人間が平凡に日々を過ごしているからこそ日常は日常足り得るんだ。平凡から抜け出したい？そんな平凡な発想に僕を巻き込んでほしくないね」
怒鳴りつけるように言うと、今度こそ何の思考も読まれないように、何も考えないように――あるいは「何も考えないように」とだけ考えて――彼女のそばから立ち去った。

仕方なく学校へ向かいながら、その道中でやはり先ほどのことについて考えていた。
確かに僕はイレギュラーな存在だ。けれどもそれを他人に言われるのはやはり腹が立つ。
その上、僕のことをよく知りもしないやつに。
どうやら彼女は他人の機嫌を損ねるのに天才的なようだ。
やはりああいう人間とはかかわりを持たないのが一番いい。

だけど、と僕は思う。
自分の行動が矛盾してないか？
最初に彼女と出会ったときは、自分のことを「平凡な高校生」と自嘲していたに、その後でなぜ彼女の発した「平凡」というワードに過剰と言えるほどに反応したのだろうか？
…いや、まあ、頭にきてる人間の言動なんてたいてい矛盾してるし、どうでもいいか。

―――――――――――――――――――――――――――――

午後の授業を受けて帰宅する。
リビングに行くと、台所で母親が夕食の準備をしているのが見える。
「ただいま」
「おかえり、カズ。今日はお父さん早く帰ってくるんだからさっさと宿題やっちゃいなさい。あ、それからこの前のテストの結果どうだったの？…」
母親の話はまだ続いているようだったけれど、ほっといて部屋にこもる。

母親は四年前から壊れている。
僕のことを死んだ弟としてしか認識していない。
彼女の中では、僕はかずふみで、まだ中学生だ。
父親も事態に気づいてはいるようだが、何もしようとしない。
むしろどちらかというと母親の味方だ。
母親が認識を誤っていても、それを訂正しようとはしない。
それは消極的な賛同だ。
イジメを看過するのと同じだ。
それが悪いかどうかはまた別の問題ではあるけれど。

どうやら弟は僕と違って成績優秀であったらしく、両親は――特に母親は、弟の面倒ばかり見ていた。
僕はと言うと、特に冷たい扱いをされるという訳ではなかったが、やはり「普通」と「特別」という扱いの差は目に見えていた。

そんな弟は、交通事故で死んだ。
友達の家からの帰り、自転車で信号無視をしたところ、乗用車にはねられたそうだ。
塾の時間が迫っていて急いでいたために信号無視をしたのでは、という話を耳にはさんだが、真偽のほどは確かではない。
もっとも、弟は自由奔放な性格だったから、信号無視をしてまで塾に遅れないようにする、ということはないような気がする。

そして弟の死後、母親は僕を弟と誤認したまま生活することになる。
どうやら母親の目にはもとから僕は映っていなかったらしい。
僕を弟だと認識すると、兄である僕がいなくなることになるのだか、母親がその点に疑問を抱くことはない。

＊　＊　＊

夕食を終え、再び部屋に戻りテレビをつける。
民放はどこの局も、来たる終末の話ばかりしていた。

十数年前にもあったらしい、「世界の終わり」に関する予言。
ただ、昔と違うのは、どうやら今度の終末は本物らしい。
どうやら今年で世界は終わりらしい。あと十カ月強。
理由を詳しく知ろうとは思わない。それが真実であるならば、どうしようもないものなのだから。

世界が終わるからといって、僕は何かをする訳じゃない。
状況には流される方がいい。
どこかの偉人が「状況は俺が作る」とでも言ってくれるだろうから。

家族を巡るこの馬鹿げた状況がいつまでも続くとは思えない。
終わるなら終われればいいじゃないか。
その方がいっそすがすがしい。

なんでこんなことを考えてるんだろう。
今日は自分の行動が訳のわからないことばかりだ。
あの謎の女の子にしても。
こういう日には早く寝るに限る。

朝から学校へ行く。
二日続けてはさぼらないことに決めているからだ。
「おはよ」
学校へ向かう途中でたけるに声をかける。
「おう、おはよ」
たけるとは、中学からのつきあいだ。
今の僕がいるのも全て彼のおかげだと言っても過言ではない。

四年前。
母親に否定されることで、家族の中に存在意義を失った僕は、自ら人間関係の構築を拒むようになった。
中学入学から数カ月。そろそろ友達としてのグループが固まるころだった。
中学生と言うものは弱いもので、友達の存在なくしては生きていけないのだ。
ここで孤独になると、後の学校生活で支障をきたす。
家族の中に居場所のない僕は、学校ですらも居場所をなくすことになる。
それくらい分かっていた。
ただ、どうしても動けなかった。

そんな僕を救ってくれたのがたけるだ。
体育会系で力が強いが、その人柄ゆえに他人からは好かれる。
放っておいてもクラスの中心人物になるタイプだ。
いくらでも友達はできるだろうが、彼は他者を拒絶する僕としつこ

く友好関係を結ぼうとした。
結果、僕の方が先に折れた。
でも、それは今にして思えばよかったことだと思う。
当時の僕をあのままにしておいたら、何が起きたか分かったものじゃないだろうから。
たけるにはとても感謝している。

他愛のない話をしながら学校へ向かう。
学校の正門の前。僕はまた、見てはいけないものを見てしまった。

「藤原さん。ちょっといいですか？」

彼女だ。

「誰だあれ？お前の彼女？中学生だろ？どこで見つけた？違うなら俺に紹介しろよ」
「テレパス、ちがう、そう、商店街、やだ」
たけるの質問に律儀に全部答えたから、彼女の方を睨む。
が、彼女は
「ちょっと借りていきますね」
とたけるに断りを入れてから、僕を引っ張っていった。
……おいおい二日連続さぼりになるじゃないか。
たけるはニヤニヤしているだけで、助けてくれなかった。

＊　＊　＊

「どうして学校が分かった？」
テレパスである以上、何でもありだとは思うが一応聞いてみる。
「『イレギュラー』というワードに対して反応したとき、自宅の映像が見えた。あとは張り込み。制服でここだと分かったから先回りした。それだけ」
あー、何かもうどうでもいいや。
「昨日一日であなたのことをいろいろ調べさせてもらった。今から私の言うことは、信じられないかもしれなくても真実だから」
昨日と一言一句変わらないセリフで前置きした後、彼女は言った。
「藤原和文は、あなたの弟ではなく、兄です」
「は？」
彼女の発言は言葉としては認識できるものだったが、理解ができず、呆けた返事をしてしまう。
…人間、とっさの時の反応は変わらないようだ。
「交通事故で死んだのはあなたの二つ年上の兄、和文です」
「…理解できない」
「理解できなくても真実です。どうしても信じられないなら市役所にでも行って戸籍を自分で確認してください。あなたに弟はいません」
「……」
そうか、母親にとっては、四年前の兄が中学生のときで時間が止まってるだけなのか…
「あなたの思考が読めないのは、あなたが自分自身でも気付かないうちに自らの思考を修正・変更しているからです。あなたの認識している世界はこの世界とは別のものです」
平凡という言葉に対する矛盾した言動もこれに由来するのか。
「あなたは私の存在を特別なものだと思っていますが、あなたの方がより特別です」
ぼくは

――――――――――――――――――――――――――――――――

「だめだこりゃ」
僕は原稿用紙を丸めてゴミ箱に投げる。
慣れないことはするもんじゃない。
「やっぱり小説作るのは難しいな。……いくらノンフィクションでも」

壁にかかっているカレンダーに目をやる。師走。
もうすぐ世界は終わる。
ただ、ぼくの世界と本当の世界の齟齬に気づいてしまった今、僕はこれを信じる気になれない。

（後書き）

兄、ノンフィクション、師走、の三段オチ？
終末設定消して、ノンフィクションで落とした方がうまい気がする
けど、まあどっちにしろ下手だからいいかw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7680q/

僕の"世界"

2011年10月7日05時32分発行